

## 中学校音楽科における表現の多様性を

### 知覚・感受し学び取っていく授業のあり方

齋藤 博紀 教職基盤形成コース 教科授業力高度化プログラム

キーワード：中学校音楽科，表現の多様性，比較聴取，知覚，感受

#### 1. 問題の所在，目的

筆者は、ピアノを通じて音楽に親しむ中で、音楽における表現の多様性を感じていた。筆者は表現の多様性とは、同一曲における奏者の違いによる表現の差異や、音楽を形づくっている要素の働きの違いによる雰囲気の違いなどであると考えている。音楽における表現の多様性を学び取ることは、知覚・感受するだけでなく、実際に表現をする際にその経験を基に意欲的に試行錯誤したり、楽曲を創った作曲者の意図について考えたりすることに繋がると考えている。このような姿はどのような音楽に触れる際にも必要な能力であり、中学校学習指導要領(2017)の「学びに向かう力，人間性等」の涵養に関する目標として示されている「主体的・協働的に表現及び鑑賞の学習に取り組み，音楽活動の楽しさを体験することを通して，音楽文化に親しむとともに，音楽によって生活を明るく豊かなものにし，音楽に親しんでいく態度を養う」ことに結びつくと考えている。

衛藤ら(2006)によれば、比較聴取によって知覚する音楽の要素を焦点化することができ、知覚と感受を結びつけることができると指摘されている。比較聴取とは、ある点で共通性をもちながらも、ある点で異なる面を見せる音楽を複数提示し、対比的にその違いを目立たせて知覚・感受させる方法である。先行研究では、比較聴取が知覚と感受を結びつけることに有効であることは述べられているが、教材を通して生徒たちが何を学び取ったのかについては十分に明らかにされているとは言い難い点がある。以上のことから、比較聴取を学習活動の軸として表現の多様性に着目した授業の意義について明らかにするとともに、授業の実際から、表現の多様性について再考することを目的とする。

#### 2. 研究方法

長野県内のS中学校3年A組(2021年12月現在)において、表現の多様性に関わった授業実践を行なった。実践での生徒の姿やワークシートの記述をもとに、表現の多様性に着目した授業の意義について考察するとともに、表現の多様性について再考する。

#### 3. 実践研究の概要と考察

##### 3.1 実践1：2人のテノール歌手による『0 sole mio』(カプア作曲)の比較聴取

### (1) 概要

同一曲における演奏者の違いによる表現の差異に着目した実践である。題材にはカンツォーネの『0 sole mio』（カプア作曲）を扱った。カンツォーネでは慣習的に楽譜通り歌われることなく、楽譜上には書かれていない表現が加えられ、歌い手によって表現の差異が際立つと考えたからである。「学びに向かう力、人間性等」の涵養に関する目標の中では「音楽文化に親しむ」に位置付けられる。「歌い手によって個性が出そうだ」と前時で感じていた生徒の発言を基に授業を展開した。L.パヴァロッチとP.ドミンゴの演奏の比較聴取を通して楽譜上の音価よりも長く歌っている箇所と短く歌っている箇所をチェックする分析的な活動を組んだ後、自分が気に入った方の表現の魅力を述べる活動を行なった。

### (2) 考察

・本実践では「音の長さ」に着目したが、「遠くから聞こえてくる声ではなく、自分の心に直接問いかけてくる情熱的な歌声がとて魅力」という「歌い手の声質」や、「誰かに愛を伝える歌なので長い音をより多く伸ばす、パヴァロッチの歌い方がよりキレイだと感じました。」という「歌詞の内容」と関わらせた記述も多く見られた。生徒たちがそれぞれの価値観で演奏の価値判断をする姿が見られた。

・H生は振り返りで、「楽ふ通りに歌うことが大切なのではなくてその歌う歌で自分は何を伝えたいのかを考えるのが大切だと思った。パヴァロッチもドミンゴも自分自身で伝えたいことがあって、それに合った歌い方をするから、のばす所や短くするところが楽ふと違うのだと思った。」と記述した。H生は演奏を通して自分が何を伝えたいのか考えることの大切さを学び取っていた。歌唱の学びにおいても生かされていくものだと考えられる。

## 3.2 実践2：『魔王』（シューベルト作曲）の前奏を用いた編曲（創作）の活動

### (1) 概要

音楽を形づくっている要素の働きの違いによる雰囲気の違いに着目した実践である。題材はシューベルト作曲『魔王』で、1年次の既習教材である。本実践は「学びに向かう力、人間性等」の涵養に関する目標の中の「音楽活動の楽しさを体験すること」にねらいが置かれたものである。①教師による右手に変化を加えた『魔王』を3種類鑑賞、②グループ活動による『魔王』のアレンジの試行錯誤とその成果を全体共有するという活動を組んだ。これらの活動を通して音楽を形づくっている要素の働きを実感したり作曲者の意図について考えようとしたりする姿を願った。

### (2) 考察

・①では、筆者は『魔王』の右手の3連符の同音連打を2分音符、4分音符、8分音符に変化を加えて生徒たちに鑑賞させた。筆者は、音価が細かいほど緊張感が高くなると感じていた。しかし、実際の生徒の姿としては、決してその枠にはまることなくそれぞれの感性を通して3種類の演奏を聴き比べていた。生徒の多様な感受に驚かされるとともに、生徒たちのこれまでの経験値によって感じ方は大きく異なるのだと感じた。

・②では、既に完成された作品に手を加えるという慣れない活動に対して、生徒たちは筆

者が示したルールとヒントを手がかりとしながら、グループでのイメージに近づけようと変化を加えていった。変化の加え方について具体的に示したことで、音楽を形づくっている要素の働きに注目しやすくなったと考える。また友と共にアイデアを出し試奏する中で、その雰囲気の違いを感じ取り、自分たちのイメージに近づけていったのだと考えられる。あるグループでは、「明るい感じにしたい」というある生徒の言葉をきっかけに、「高い音を使うと明るい感じがするから、音域を高くしよう」「短調だから長調に替えよう」などのように感受を基に知覚と関わらせながら、音楽の経験を生かして編曲を進めていく姿が見られた。楽譜が読めずピアノを弾ける生徒がグループにいない場合には授業者が介入し、「どんな感じにしたいの？」と感受を基に「1つ要素を決めているいろいろ試してみよう」と知覚に結びつけて促したことにより活動が活性化した。

・各グループの成果を全体共有するというオープンエンドの形で授業を締めくくったことにより、「同じ明るいというイメージでも、アレンジの仕方で違う印象を受けた」という記述が見られた。これは、音楽を形づくっている要素の働きの違いによる雰囲気の違いを感じ取った姿であった。筆者が授業の末尾で「様々なアレンジが見られたけど、ではシュベルトはなぜこのように作曲したのかももう一度考えてみよう」と発問をすることによって、授業者が考える表現の多様性を学び取る姿に近づいたかもしれない。

### 3.3 実践3：ディズニーアニメのBGMを聴いて知覚と感受を関連づける活動

#### (1) 概要

中学校学習指導要領（2017）の鑑賞領域において思考力、判断力、表現力等に関する資質能力の一つとして新たに挙げられた「生活や社会における音楽の意味や役割」に関わった実践を行なった。題材にはディズニーアニメのBGMを2種類扱った。音だけで鑑賞し付随するアニメーションは最後に視聴した。この題材で自己のイメージと音楽を形づくっている要素の働きを関連づける活動を通して、普段気にとめない映像につけられた身近な音楽に価値を見出し、興味・関心を高める姿や、音楽を形づくっている要素の働きの違いによる効果を実感する姿を期待した。「学びに向かう力、人間性等」の涵養に関する目標の「音楽によって生活を明るく豊かなものにし」にねらいを置いたものとなっている。

#### (2) 考察

・第1時では雰囲気や具体的なシーンが想起され、楽器・音の高低や速度、リズムの働きを根拠に示した。「音の高低の違いからキャラクターが2人いて、サイズ感が違う」という知覚と関わらせた感受を基に、教師がもとの音楽の速度とリズムにそれぞれ変化を加えたものを演奏し、どのような印象を受けるか、もとの音楽とどう違うか問いかけた。「踊っている感じが、疲れて動けなくなるような感じになった」「楽しい感じが悲しい感じになった」など生徒たちが音楽を多様に感じ取り、自ら感じたことを活発に語り合う姿が見られた。

・H生は第1時で「BGMをどうするかで映像の雰囲気がガラッと変わると思った。BGMを登場人物の動きに合わせて、音ハメみたいにすることで見ている人が面白いものになると思った。」とし、第2時で「BGMを聴いただけで、1人1人がどんな映像を思い浮かべるのか

が違かったから、BGM は面白いと思った。高い音や低い音のかけ合いをすることで焦っているような危機感が感じられると思った。キャラクターや場面の状況に合わせてBGMをつくっているのだと思った。」と記述した。実践1や実践2のように歌詞などの内容が伴わず、映像無しで音だけで鑑賞したことや、友の多様な感受に触れたことが記述内容の要因として挙げられる。第1時では高い音と低い音があることでキャラクターが2人いることを表していると記述していたが、第2時の鑑賞を通して、高い音と低い音のかけ合いをすることで焦っているような危機感が感じられたと記述し、2時間を通してBGMはキャラクターや場面の状況に合わせて創られていると、まとめていく姿が見られた。

#### 4. 総合考察

同一曲において奏者の違いによる表現の差異や、音楽を形づくっている要素の働きの違いによる雰囲気の違いについて比較聴取を用いて行なうことにより、表現の多様性を知覚・感受し、学び取っていく姿が見られた。振り返りでは、歌い手の思いや音楽を形づくっている要素の働きなどに迫る発展性のある記述が見られた。表現の多様性の感受による学びは、表現活動につながるものとして意味づけられ、鑑賞と表現の一体化に向けた一つの視点として意義在る授業として考えられる。音楽には様々な表現の可能性があることを実感させ、生徒が音楽表現をしていく際に、ただ楽譜通り書かれた表現をするのではなく、視野を広げ、よりその音楽にふさわしい追求や自分たちの思いをしっかりと表現できるような追求を行なっていくことを期待できると考える。「学びに向かう力、人間性等」の涵養に関する目標において、実践1では「音楽文化に親しむ」、実践2は「音楽活動の楽しさを体験すること」、実践3は「音楽によって生活を明るく豊かなものにし」に位置付けて行なったが、生徒たちの実際の姿から「音楽に親しんでいく態度を養うこと」につなげることができたのではないかと考えられる。

また、3回の実践を通して筆者の予想を遙かに超える生徒たちの多様な感受に出会った。このことから表現の多様性の学びは、その多様性を感じ取る主体によっても変わってくるのだということを学んだ。音楽は感性の部分が生じてくるため、個によって多様である。しかし感じ方が多様だからこそ、そこに個々の思いすなわち多様性があることでそれを授業で生徒たちと共有することで新たな面白さが生み出されるのではないかと考えられる。多様な感じ方を生徒同士で共有できる場をより充実させていくとともに、教師としては、自分の授業を展開していく上で都合の良い感受だけを扱うのではなく、個々の多様な感受をどう受け取っていくのかというところを今後現場に出た際にも考え続けていきたいと思う。

#### 主な参考文献

文部科学省(2018). 中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 音楽編. 教育芸術社  
衛藤晶子・小島律子(2006). 音楽授業において知覚・感受を育てる方法論としての比較聴取—表現の授業の場合—. 大阪教育大学紀要 第V部門 第54巻 第2号 29-44